

金井純子作 石井忠雄脚色 「父の死を超えて」

飯田誠一 純子、純子。待つて。

金井純子 あ、誠一君。

誠一 君のお父さん、亡くなったんだって？ 大変だったね。それで、これからどうするつもりなんだ？

純子 どうするつもりって、卒業後のこと？ そうね。英語の専門学校に行くわ。

誠一 じゃあ、生活のほうはどうするのさ。

純子 もちろん昼間は働かなくちゃね。

誠一 純子って、見かけによらずタフなんだな。おれ、父さんが死んですっきりしよげ返ってるって思ってた。

純子 うん。ほんとはそんなにタフじゃないの。でもわたしにはイエス様が付いてる。父の死を通して、とても大切なこと教えられたわ。ねえ、聞いてくれる？

ナレーション それは、金井さんが信仰を持ったばかりの3月のことでした。急性腹膜炎で、お父さんが近くにある大学病院に入院したのです。手術は無事に済み、手術後の経過は良好でした。そんなある日、春休みに張って純子さんは、土浦市のおばさんの家に遊びに行ったのです。そして数日をそこで過ごし、東京に帰る時のことでした。

純子 じゃあ、おばさん、帰るわね。

おばさん そう、もう帰るの？ 早いわね。

純子 入院中の父のことも心配だし。少し用事もあるから。

おばさん そうね。でもお父さんはきっと元気になるわ。心配しないでよく看病してあげてね。本当に大丈夫よ。

純子 おばさん。それ本当なの？ なんだかわたしにウソついてるみたい。

ナレーション おばさんはクリスチャンでしたので、この純子さんの言葉に胸を深くえぐられました。

おばさん 純子ちゃん。もう一度上がって。話があるの。(間)純子ちゃん、驚かないでね。お父さん、本当はガンなの。このことは、あなたやお父さんには内緒にしておきたかったの。だけど、あんたもクリスチャンになったのだから言ってもいいわね。病院の先生は、「もうそんなに長くない」と言ってたわ。

純子 おばさん、本当なの？ わたしも、手術のあとでおばあさんやお母さんが泣いていたので、おかしいとは思っていたんだけど。でも、ウソであってほしいと思っていたわ。お父さん、本当に死んじゃうのね。

ナレーション 純子さんのお父さんは、若い時から苦勞をして、5か月前にマッサージ師の資格を取り、開業したばかりでした。その父がガンだとは…。純子さんは、おばさんと共に、そんなお父さんがイエス様を信じてガンが治るようにお祈りをしました。そしてその時から、純子さんの看病が始まったのです。

純子 お父さん、今日はどう？

父 うっ！ うっ！ 純子か。どうも腰の辺が痛くてね。(苦しそうになる)

純子 さすってやろうか？

父 頼むよ。

ナレーション 痛むところをさすると、お父さんはうれしそうにしています。純子さんは、いつイエス様のことを話そうかと機会をねらっていましたが、なかなか勇気が出ません。そのうちに――。

父 (うなる) 純子、もういいよ。お前も疲れたろう。もうお帰り。

純子(モノローグ) お父さん、苦しそう。でも、ここでどうしてもイエス様を伝えなくては…。

純子 お父さん、お祈りするから聞いててね。父なる神様、お父さんの…。

父 うるさい！ 帰るんだ。お父さんに必要なのは、痛みを取ってもらうことだ。今すぐこの痛みを取ってくれるなら、イエス・キリストだって仏様だっていい。

ナレーション この言葉は、純子さんにはショックでした。

純子 (祈り)(エコー)なぜこんなにお父さんは苦しまなければならないの？ 神様は、お父さんの苦しみを取り去る力はないのですか？ わたしの祈りはなぜ聞かれないのですか？

ナレーション しかし、そんな心に、「もしできればと言うのか。信じる者にはどんなことでもできる」というマルコによる福音書の言葉が響いてきました。この言葉に励まされて、純子さんの粘り強い祈りが始められました。その祈りが聞かれたのでしょうか、お父さんは一度退院しましたが、すぐ再入院しなければならなくなりました。そんなある日、病院で――。

純子 お父さん、聖書を読んでもいい？

父 うん。

純子 詩篇の 41 篇にこう書いてあるわ。「幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。主は災いの日にその人を助け出される。」

父 (苦しそうなうめき)

純子 お父さん、痛むの？

父 いいよ。続けて読んでくれ。

純子 大丈夫？ じゃ読むわね。「主は彼を見守り、彼を生きながらえさせ、地上でしあわせな者とされる。どうか彼を敵の意のままにさせないでください。主は病の床で彼をささえられる。病むときにどうか彼を全くいやして下さるように。」(詩篇 41:2-3)

父 (苦しうなる)

純子 お父さん、お父さん、痛むの？ 純子がさすってあげる。(純子、さする。)どう、少しは楽？

父 うん。…すまないな、お前に苦勞をかけて。

純子 いいのよ。わたし、少しも苦勞なんかじゃない。お父さん、痛いときは祈ってごらんよ。楽になるから。ねえ、お祈りはこうするのよ。「天のお父様、祈りを取ってください。イエスさまのみ名によってお祈りします。アーメン。」

ナレーション 時々襲う激痛をこらえて、純子さんの言葉を聞いていたお父さんは――、

父 (うめきつつ)天のお父様、わたしの…、痛みを…、取ってください…。お願いします。

ナレーション 苦しみつつ祈る父親の姿を見ながら、彼女は、数か月前に怒って祈りを拒否した父親の姿を思い出していました。そして、“神様は、祈りにこたえて、確実にお父さんの心を変えていてくださる”ことを確信しました。

その後、日がたつにつれ、お父さんの苦痛はウソのように薄れ、純子さんが聖書を読むのを心待ちするようになり、ついにある日、イエス・キリストを信じる信仰告白を、土浦のおばさんとその教会の牧師先生の前でしたのです。けれども、それから間もなく、7月5日の真夜中――。

効果音 (電話のベル)

純子                    もしもし、金井ですけど。

おばさん              (フィルター音)あ、純子ちゃん、みんなを連れて病院に来て。早くよ。

ナレーション        病院に着いた時、お父さんは、人工肛門から激しい出血がありながら、安らかにベッドに横たわっていました。

純子                    お父さん、苦しい？ 苦しいの？ お父さん死んじゃうの？ ウソでしょ？ だって神様は何でもできるんですものね。

ナレーション        でも、父親はただ静かにうなずくだけでした。しかし、その顔はほほえみさえ浮かんでいるように見えました。そして、お父さんは純子さんが疲れてまどろんでいるうち、安らかに天に召されていったのです。

音楽                    (安らかなメロディー)

ナレーション        それから数日たったある日、あるキリスト教の高校生の集いで、彼女は先輩の一人とこんな会話をしたのです。

純子                    わたし、一生懸命にお祈りしたのに、神様は、どうしてお父さんを取ってしまったのかしら。高校卒業を前に、もっと生きてほしかったわ。

先輩                    そうだね。でも神様は、君に一番良いことをしてくれたと思う。だって、神様は君のお祈りを聞いて、お父さんの苦しみを取り去ってくれた。肉体の命は取られたけれど、お父さんはイエス様を信じて、永遠の命を持って、今、神様の下で生きている。君もまた、そこで会うことができるんだもの。それに、君は、今まで自分の好きになんでもできたけれど、今度は、いろいろと耐えなければならない。忍耐を学ぶことができる。これから神様に従っていけば、主は最善のことをしてくださる。お父さんの死を通して、そのことを学んだはずだよ。

純子                    そうね。そう言われてみれば、これからは、お父さんに頼ることはできないけれど、神様がわたしを一番良い方向に導いてくれるのね。わたし、これからどうなるか分からないけれど、信仰をもって今与えられていることを頑張るわ。

ナレーション        金井さんは、高校卒業後、英語の勉強を始め、将来、英語を生かした働きを神様のためにしようと頑張っています。お父さんはもうこの世にいませんが、彼女には、天の父なる神様がいつも共にいてくださるのです――。

<完>